
ようこそ

朋次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よつこじ

【ZPDF】

Z92050

【作者名】

朋次郎

【あらすじ】

ようじ。題名通りせ

気がつくと私は、海の波の白く小さく水しぶきを絶え間なく浴びて横たわっていた。泡立つたしぶきとしぶきの合奏の中、一瞬のかすかな静けさがあり、その時は視界いっぱいに大きな黒い岩が私に覆いかぶさっていた。またちらりと青くて高い空が見えたりする。私は海水のしょっぱさを全身に感じながらも、海水の冷たさは感じなかつた。

「どうして私がここにいるの・・・」

私はそのままじつとして波の音を聞き、青いお空と黒い岩を見ていた。

「やあ、気がついたみたいだね、新しい人間だね」

かぼそい陰気な声が私の身体の下の方から聞こえてきた。

声の主を見ようとして身体をずらそうとするが動けない。私は目線だけ物憂げに下に向ける。波と波の間に、やせて頬のこけた青白い男の顔が見えた。身体は見えない、首までだ。

「動けるかい、君？まだ動くにはちょっと無理かな、まだ来たばかりだしね・・・」

男の首はそうつぶやくと目を閉じた。

「しばらくここにじつとしていたらいによ。ここは暖かいから」

それから男はふうっと消えた。

「どうして、私がここにいるの？」

私はそう言おうとしたが声には出さなかつた。そう、多分私は自分でここに来たのだから。

私はぼんやりとして目線を上に向ける。大きくて黒い岩が見える。鳥だろうか、ギャアギャアという泣き声がかすかに聞こえる。ああ、そうだ。ここは崖の下だ。確か私は崖の上にいた。でもどうしてここにいたのかはわからない。

私は横たわった姿勢のままで手をあげた。両手をあげたつもりだ

つたが左手だけついてきた。私の左手は、甲からベロンと皮がめぐれて骨が飛び出していた。ザクロのような肉の割れ目が見える。私は力なく左手をおろした。無気力な思考の中でそれでも私は考える。波にそつと揺すられながら。

「ああ、そうだった。私は崖から、あの黒い岩の上から飛び込んででもなんで飛び込んだのかしら……よく思い出せない。」

「これだけははつきりとわかる。」

私は死んだのだ。私は飛び込んでこの崖の下の岩にたたきつけられた。

死んだ。

私は考えるのをやめて目を閉じ、しばらくじっとしていた。不安はない。ただ何かから解き放たれたような自由な気分だった。でもそれは爽快とはちょっと言い難い。

「はい、新入りさん！」

だしぬけに元気な女性の声がした。目を開くと上空に血だらけになつた20代前半位の女の子がいた。彼女のすぐ横には右目のみつぶれた若い男性がいた。二人ともにここにこしている。女の子の方が言つた。

「どうしてここに来たの？」

「どうしてつて……崖の上から飛び込んだのよ。でもどうしてそうしたのか自分でもよくわからないのよね……」

私は自分に言い聞かせるように返事した。

「あー忘れてしまったのね。あたし、あなたの顔を見て多分そうじやないかと思ったの。だってあんまり苦しそうじゃないし、ちょっとほんやりしてこるからね」

女の子はそこで言葉をとぎり、「よほどつっこじとがつたのね」と小さい声で言つた。

私はそうかもね、と軽くうなづく。そして全部忘れているみたい

でよかつたと思った。爽快ではないが、自由な気分はそこからきて
いるみたいだつた。

彼女はじつとしている私を見下ろして満足げにうなづいた。

「ここは居心地の良い場所よ。あたし達は心中なの。あたし達の身
体はこの崖沿いに30メートルほど入った海底に沈んでいる。両手
両足でお互いできつく縛り、薬を飲んだ後二人で飛び込んだの。そ
りやあ、苦しかつた。たかが結婚を反対されたくらいで軽く死んじ
やつたりして。あたし達は薄暗い海の底で心中を選んだことを後悔
して何度ケンカしたかわかりやしない。でもいくらケンカしたつて
もう生き返りはできない。で、明るく暮らすことにしてたの。あんた
も少しは死んだことを後悔するだらうけど、何、すぐに慣れるよ。
ふふふ、あれからもう30年もここにいるの」

恋人達の死んだ当時のままらしい血だらけの顔を良く見ると若々
しい。

「死んでから30年。年をとらないみたいね、私もそうなるのかし
ら・・・」

私がそういうと、女の子は氣の毒そうな顔つきになつた。

「まあ、年はとらないみたいだけど。亡骸の方は変わるよ。あたし
の魂は・・ホラあんたが今あたしを見ているのがあたしの魂よ。死
んだままの若いけど血だらけの・・亡骸の方はもう完全な白骨死体
よ。あんたが自由に魂を飛ばせるようになつたら観にいらつしゃい
な」

私は身体がここにあって、魂だけが飛ばせてどこにでも行けるよ
うになれるのかなあ、と思いながらあいまいにうなづく。女の子は
話を続けた。

「でも、あんたはかわいそつ。まだ自分で自分を觀れないようだか
ら教えてあげる。あんたの顎から下はねえ。粉々に碎かれている。
はつきりいって、もう顎はないよ。どうやら顎から飛び込んだみた
いね。で、どつかの岩に最初に勢いよくがーんとぶつかってそれか
ら、身體が反転してここにきたんだ。あんたの背中に岩の先が

ささつて、腰から下はその背と頭の間にがっちりはまつて動けなくなっているね」

私はからうじて動く左手で自分の顔をさわった。確かに顎と思しきあたりが存在しなかつた。でもショックは感じない。再び女の子にほんやりとした目を向けるとしゃべりだした。

「あたしだつて魂血だらけ、本体ガイコツ、で見られたもんじゃないけど、ここには姿姿なんて関係ない世界だしね。じゃあ、また気が向いたらまた来てあげる。自分のことを思い出したら教えてね。でもあんたが前の世界・・生きていた世界に未練がないようでよかつた。一度事故で崖から落ちてここに来た人がいたけど、悲惨だつたもの。あたし達がどんなに慰めても自分が死んだことがわからないのか、わかりたくないのかおいおい泣くばかりでさ。1週間たつて死体が回収されお坊さんがここまでお経をあげにきてやつと消えてくれたんだよね~。ああ、それまでどんなにうさかつたことか。じゃ、またね。あたし達、身体のあるところに戻るね。ガイコツでも大事なあたし達の身体だもん！」

女の子はしゃべるだけしゃべると、男の人とパッと消えた。

「ねえ、いつから身体から離れて魂を自由に飛ばせるようになるの」私は問いかけたが遅かった。私は波の音を聞き、岩を見つめてぼんやりとしていた。そうしていると今度は、上手の方から声が聞こえた。そこにはどろんとした目の中年の男が私を見下ろす。男は言った。

「あんた、その身体。誰か引き取りに来るかね」

私はしばらく考えたが誰も来ないよつた気がするといつぶやいた。

男はそんな私を見て

「ああ、あんた生きていたころの記憶、あんまりないようだね。よかつたね。そんなに苦しくないだらう。すぐに魂だつて飛ばせるよ。ほら、もうすでに首と左手が動かせるし」

「おじさんはどうしたの」

「わしゃあ、溺死だよ。2年前に釣り船から落ちてなあ、まったく台風の近付いている日にや船を出すもんじゃないよ。あちこちの海をさまよい、ここにやっと流れ着いたが誰も死体を引き取りにきてくれないんじや。わしゃ子供が4人、孫が6人もいるのに、浮かばれないよな」

男はため息をついた。

「みんな探しているだろうか・・今でも海水をたっぷり飲んだ腹が苦しいんだ。すぐくつらくてたまらんよ。あの心中カップルのようなあつかけらかんとした気分にはとてもなれんよ。あんたもまあ、よく見ればまだ若いしかわいい顔をしていたのだろうに何を好きこのんで死んだのかね。顎をはじめ身体全体傷だらけでひどい状態だよ」

言つだけ言つと男は目と口をゆっくり閉じた。すると輪郭がぼやけすう一つという感じで消えてしまった。

私は再び一人になり、ゆっくりと自分について考えようとした。やはり記憶ははつきりしなかった。無いに等しい記憶だった。私は生きたくなかったのだ。それほどつらい人生だったのかしら、でも生きているつてどういう状態だったのだろうか。ああ、私にはそれすら思い出せない・・・。

また人の気配がしたので目を開けると今度は最初に見た頬のこけた男性だった。

「みんな君が珍しいのでよつてくるみたいだな」

男はぽつりと言つたが少し迷惑そうな表情だった。

「一体ここには何人の人がいるの？」

「知らない。新しい死人を観る趣味のないヤツやしゃべりたくないヤツは絶対にうごかないからな。もちろん私もその中の一人だがね。あのカップルが来るのが分かつていたんですねぐに身を隠したんだ」

「あなたは人嫌いなのね。でもそれにしてはよく来るじゃないの。あなたが来たの、2回目よ」

男は腹立だしげに言つた。

「そりやそつだ。君は私と全く同じ死に方してるんだ。あの崖から飛び込んで最初に衝突した岩まで同じだ。私は40年前からここにいる。その上に君が来たものだから少々重たくて不愉快なんだがね」「えつ、私、あなたの上にいるの」

「いるさ、上や横から見たくらいではわからないが、君の肉のついた身体の下に私の骸骨がある。君にや痛いとか苦しいとかの感覚がないようだから、文句言つたつてしょうがないがね・・。でもそのうち君が完全な白骨死体になつたら、私の白骨と重なり合つてまるで心中のよう見えるだろうよ」

「・・すみません。知つていたらここに来なかつたでしょ「うけれど、どうしましようか」

「いいよ、別に。だがこの年になつて女性と出会えるとは思わんかったがね。はつはつは、まあ、しばらくは我慢しよう」

男は初めて笑つた。そして話を続けた。

「君の身体は岩にはさまつているが、もう少し経てば肉が溶けて骨が見える。そしたら、波の荒いときにどこかへ移動するだろう。私のように岩の骨まで岩の先が貫通していないからね。それまでの仲だ。本当は、私は私でじつとしていたいのだがね」

私はこの男の死体の上になつてているといわれてもびんとこなかつた。何の感情もわいてこない。ああ、そうなの・・ふうん、という感じ。「死」と同時に心の何かをも「く」したのはわかつた。

やがて空は夕焼けになり、すぐに星の瞬く夜になつた。私はぼんやりしていたが、ふと思いついて首だけぐるんと後ろに向けた。

「ねえ・・、下にいる男の人・・」

「話しかけるのは、やめてくれないか・・」

「私何もかも、みんな、忘れきつてここに来たみたいなの。ごめんなさい・・、一つだけ教えてくださいな」

「一つだけならいいよ、どうぞ・・」

「私、ずっとここにいるのよね・・、どこへも行かないよね」

「そうだよ・・この崖の下にある身体は動くといつても海流の関係で遠くへは移動しないよ。あ・・・もしかしてそういう意味でなくて、昇天したくて聞いているのか？昇天できるのなら、ここにいるのもそう永くはないだろう。君のように生前の記憶がないならかつて昇天しやすいよ。どうやるのかは私は知らないし、知りたくもないがね。ここに来た何人かは神仏の助けなしに一人で消えたよ。死体だけあって魂の見えないのがそれだ。君もそうしたければ、するがよい」

その言葉を聞いてふいに私は怖くなつた。

「私・・・昇天なんてしたくないわ。よくわからないけれど、昇天なんかしたくない」

「そうか・・じゃあ、ここに好きなだけいるとよい。ここは、暖かい。ようこそ、君。崖の下の国へ。なあに、じきに慣れるよ。もう少ししたら魂を飛ばせるし、欲を出しきえしなければ、ここはとても温かい。とても良いところだ」

わたしはうなづくとぼんやりとした頭のまま、波しづきのじょっぱさを全身に浴びつつ、うつとりと目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9205o/>

ようこそ

2010年11月21日21時25分発行